

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	灣頭の村（原村）：文苑
Author(s)	蓮太郎
Citation	龍南會雜誌， 1 3 2： 5 7 - 6 3
Issue date	1909-10-30
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5793
Right	

金造は呪ふやうな、怒るやうな、浪の音、潮の香に満ちた漁村より結句ごれだけ此ちらを喜んだか知れぬ。夕方になると何時も柴笛を吹いて田畠の畔を沿ふて時には高い聲に詩を吟ずる、遠う近うで稻刈る者の歌が聞こえて百千鳥が消魂たましく裏の山に囀る。而し奈何に神經を慄るやうな變つた自然に接してまた都會の繁雜な街を往來しても、心の衝動を急迫に感ずるやうなことはなつた。唯漁村に得た二つの印象―音樂の先生と小狗のスタンをせめての享樂として―狗の可愛さと先生に教はつた海の歌とはまゝ此に於ても繰りかへされたのであつた。

(完)

灣 頭 の 村

(原 村)

蓮 太 郎

錢坪山の余脈が東と南に流れて海と出遇はした處が東に蛇貫の鼻となり、南に相地の岬となつて、茲に狹まれた到つて小さな入江がある、原村は此の入江も錢坪山裾の間に展けた極く急斜面の阪地に点々部落をなした総稱で山の手に沿ひ平原、時森、舟木、岩狩、林の少部落が控へ、入江の海岸に原公間處二村の白茅茅屋が帯の如く海岸線を縫ふて居る。

東風が吹くと廣島灣の高波は相地の岬に猛烈な磯波を起して船の碇舶には余程危険であるけれども北風は屏風の様な錢坪の裏山に遮られて入江の冬は到つて安全に、相の子や帆船の良く舵かつて居るのを見る、此の邊は一体に古來から鼓ヶ浦と稱せられ春先から夏にかけて廣島灣の潮が温るく香

り出すと狭まからぬ眼界はこんど展け遙かに能美島から黒髪姫ケ子甲それから南によつて杜^{はしら}情前^{なまけ}島大島の島々が如何にも長閑^{のんびり}、薄霞に煙つて居る光景は海沿ひの往還に往きかう人をして、内海美の妙なるに憧れせしめる。

村から見た海の景色はごうしても晩春から夏の終りに大自然の影が見ゆるけれども殊に春先き山際の山櫻が綠色に彩られた頃、晩方のうす闇に立つて暮れ逝く海畔の夕景を見た人は必^{かならず}と言ふ可からざる自然の悲哀に打たれるのであらう、海軍の實彈射擊演習は此の頃主に甲島を中心として實施せられるのであるが夕方になると韻々たる砲聲も静まりかへつて、とつぷり暮れ果てた海畔には唯若松行きの石炭船位が舶^かつてゐるばかり。夢の様に煙つた水天一際^{すいぜん}の闇をたま／＼閃き渡るサーチライトの昂じて來る神經は一層激しう刺戟せられ、他愛もなくもの穩やかな光景に消え入る様な氣がする。

情^{なさけ}の瀬戸のイカナゴ臘も丁度此の頃で大島の肢部が情に切れた水天一條に宵から點き出す漁火が更けるにつれて段々増し、果ては一直線の火の棒が水平線を焦^{こが}す様は言はれぬ美觀である、春も次第に暮れ此の漁火が消ゆる頃になると段々砂濱に陽炎が立ち初める。私は村の夏の風致はいけなくなつたと思ふ、殊に近頃都會の華^{はな}な男や女が海岸に潮染^{うしじめ}の浴衣を翻^かし出してから一層村の夏は不調和な、不自然に思はれてならぬ、かの眞音な海の色や、天空を沖^ついて群がり立つてゐる夏雲の偉觀を見ると此處の磯に立つもの余り不愉快な氣はせんけれども、夏になるとどうしたものか、高原体の山谷を想ふ事が切である。村の夏は全^{ぜん}くいかん。

秋!! 淡水の畔に咲いていた毒々しい彼岸花やコスモスがだん／＼凋れる頃は、日輪は最う次第に南に偏かたよつて、情島あたりから出初める。此の頃は海も大分暗くなつて明瞭はつきりし出し南の海上を占領している大島の文珠ヶ岳や岳山が澄んだ天空に一層高く見ゆる、だん／＼村は荒隙に變つて沒趣味な、色彩の味ふべきものはなくなる。

けれども、海岸を離れて明照寺川の谷間に沿ふて一度足を平原の郷に蹈ふみこ込んだ人は、假令肥土の香が高いにせよ、澄みきつた冬潮の空氣を透して遙か二十里の眼前に悠々聳そわっている石槌山の雪景を見ては、早くも冬の威嚴に戰たたかのくであらう。

あゝ石槌山の雪景!! 如何に之が吾々の詩情を動かす種であらうか、霜月から師走にかけ、暫し紅かつた山々の紅楓は櫛くし、櫛くしの葉は落ち盡くしてがつかり淋しゆなつた暗色の自然に、ばつとした烈しい印象を與へるのは二十里の冬潮を越えて伊豫平原の彼方にそ／＼り立つた石槌山の雪景である。情島の沖から出る日輪は愈々南の天を一寸と廻つて直ぐ室津半島の方に落ちて行くので、五時頃には最う暮れる、ドシン／＼と雨戸を吹つける木枯しが、竹藪やなんかにあたつて、ブ／＼／＼唸うなる冬の晩方など村の淋しい事は又格別である。

私の未だ幼けない頃、海岸に軌道レールの設か出来ない頃狼蒸氣おほゆめと言ふのが大島の沿岸を航海していた、冬の暮れ方など、戸外に遊んで居ると乾藻な空氣を透してその狼蒸氣がブ／＼／＼吠うゆるのに、非常々々怖れたものである、けれども今頃はかなりな鋼鐵艦が大島の近海を航海していて沖の久賀港にポー／＼と汽笛をあげつゝ入港はいこうつて行く様は、景氣良い光景である。

山の手の諸郷と海岸との間に杵崎山が擦鉢を伏せた様に横つてゐる、一体に赤土の山であるけれども近頃大分松が立つて山の手に向いた側は良く肥え山の頭が段々高くなつてゐる、山の頂上に杵崎神社と言つて式ばかりの石堂がある、言はゞ村の公園なので茲からは廣島灣の果から柳井灣の彼方の室津半島まで一眸の中に見え、その上原村は悉く眼下に見下す事が出来る。皐月になると藤と躑躅花が假初の晴衣裳と言ひたい様に此の山を飾る外格別色彩の變化はなく、松の緑が永劫に纏うてゐる唯一の衣裳である。昔はそれでも茲の山腹で年に一度の花角力があつた村の家々から一本二本宛割木を持ち合して、祭の夜は天も焦るばかりに火がたかれその火の元で年が年中汗垂らして活くる村の若衆の、生き／＼した元氣が示されたのであつた。今は止んで土俵やなんか何年かのタイムに荒かさ終つてゐる。

鳥居の根から、相地岬が突つと南に突出してゐるのが良く見ゆる、岬の崖下にある白い西洋造りの建物は村の小學校なので十年間村の村會や、區長會議で爭論の上尙漸く出来上つたので、神代村の高等小學生と原村の尋常科生を收容して居る、近い昔村の圖書館も出来、實業補習學校も設備されて今では叔父さんや叔母さんの様な補習學校の生徒が校門を出入りするのが見られる。

私は所謂文明の力と言ふものはつく／＼怖ろしい物だと思つた。未だ茲に學校が出来ない昔、丁度明照寺の鼻にさゝやかな校舎の在つた頃は、皆みじめな百姓となりその裏面目な百姓の妻たらんが爲めにせつせと勉強してゐたのだつた。理屈を言う爲めに勉強するものは一人もなかつた、けれどもそんな時代は遠う逝つて新らしい世紀の曙光が茲の村にも射しこんだのだ。文明の翼は茲を見の

がさなかつた。機はたの音は段々聞わなくなつた、そうして補習學校の生徒は次第にハイカラになり若い青年の顔が田圃に減つて、曠の路を中學の制帽が縫ひ出した、郵便配達は女學世界の封筒をカバンに入れて來だし、田圃の娘は汽車の窓から見らるゝのを辱かしがり出した、そして雜誌の繪えに夢に知り與平に馴染み、理想や神聖な戀ラヴなんかと、聞かれん口を利き出した。

夏が終ろうとする八月の十五日には神代の八幡宮に祭禮がある、その時には村の百姓の汗水になつた華やかな御輿が出る、年々一度の晴の塲處に村村の娘はごんなに身姿みなりの爲めに苦心する事であらう、カン／＼照る眞夏の太陽に絹編蝠傘が處々で反射してるのは常例の様になつて來た。小春日和の午後など山の手の郷を通ると異様に建築した納屋なやの機械湯で娘達の懷かしげな鄙歌ひなうたが櫛くしのきしりの間に妙に聞へ、絨操けいそうりに合したチャンリ節の滑らかな聲が靜かな村に響いていたのが、最う稀にも聞く事は出來ない、私は此處の村を通るといつも良くアービングのスリーピーホローを想ひ出したものだが然し、今頃は感想も何も目茶苦茶に敗れててしまふ。

時代の影と言ふものはこんな山間の僻地をも余さず射して行くかと今更らしみ／＼嘆息せられるゝ、昔唄つて織つた娘達は最う眞面目な人妻となり澄すまして居るけれども時流に迷つて居る娘達は昔の人の跡をも踏ふまず唯ボツとした煙の様な或るものに慄おそれて居るのだ、汽車の窓から首を出した華奢はでな都人みやこびとは質朴な村の男女をして右や左ひだりに動かしている、レールの踏切に立つて汽車の行衛を見送つた娘達の心の中には必ず何かの思が醸かし初めているのだ

そうして此の不思議な思想の流れは段々支流を吞併してだん／＼幅を廣くし谷から谷を廻つて永

却の果てへ流れ出でんとする。

茲に湖水が出来て濁流を呑んでその汚物を沈澱しようとしたものがある、それは小學の先生が青年矯風を叫んで青年會を設立した事である、青年會は其の後幾度かの運動會を催し、物産品評會を開催し引き續いて圖書館をも會の附屬として立てた、けれどもそれは青年自らの醸した酒ではなかつた、湧いたアルコホルは段々蒸散して青年會の名札のみは今も小學校の門柱に筆跡を止めて居られ共、開會日の晩なぞ居酒屋の框などで圍碁を爭ふ青年は多いけれども、會場に點けたランプの空しく吹き消さるゝ事が暫々ある。慙う之迄極端に書いたけれ共歴史は吾々に盛衰は一個のビフレーションである事を示している、原村の自然と人生は暫し世上の荒浪にかき亂されたので早晚明鐘の如く澄む事は十分信じられる、そのみならず私は唯、三者の位置に立つて皮相のみを觀察したのみであるが奥深く流れて居る血潮は未だ紅い!! 例へば原村の衰弱は大潮流上の小波の如く、不斷の流れは永久に奈邊にか向つて流れているのだ。……と左様思ふそれは斯う言ふ事が証明している。

郷から濱に十町の急阪がある此の阪を二三年前までは俵一俵かついで汗水垂らしたものである、けれども今は猫車と言ふ一輪車が急斜な河畔の石塊路をキイ／＼唸りながら半余の勞力で容易に其の運搬をしている、それから村を通して柑橘の栽培は急激に發達したもので、全時に市場の相場が村の産出品を一々推し、成熟期を過ぎると廣島あたりに送り出さるゝ、柑橘の船に積み出さるゝのを見て往還に行き交ふ人は如何に其の豊富なるに驚くであらうか。

今では家毎に牛屋に母牛の泣き聲を聞かん事はない様になつた、ホルスタンの腹を押しつゝ乳汁

を絞つてゐるのや、可愛らしい犢こしの牧場ぼくじやうの一遇ひとあひに飛び廻まわつて居る光景きやうけいや、蓮華れんげ畑はたけをのそくど牛群ぎゆうぐんの逍遙せうぎやうしてゐる處はどうしても南歐なんおうあたり、暖國ぬあくにの谷景色やけしきが聯想れんさうせらるゝ。總して原村はらむらの自然と人生は良く調和てうわして居る餘裕よゆうがあると私は思ふ、民心みんしんの動搖どうぎやうは唯ただかりそめで早晚さうばん自覺じかくの來るのは充分信じて疑はない、茲こゝに赤煉瓦せつれんがの機械湯きけいゆが立つて漂々ひたひたと黒煙くろえんを虚空こくうに吐かない限り、單純たんじゆんな農的生活のうのくわつの最終さいしゆうを告げん間は鼓ヶ浦つづみに打つ浪は永劫えいけつに美しく清らかであらう。

タイムは刻々と永遠えいゑんに渡つて逝く、雪が消ゆる頃には長閑ながかんかな春の日影ひかげが射す、五月の花が凋しむ頃には眞夏まなげの炎帝えんていが白い沙濱さひんにカン／＼と陽炎やうえんを燃やす。昔むかし村の經營けいぎやうに盡力じんりきした人々の内には向山むかやまに一片の紫煙むらさきえんを棚引たなひきかしたものもあるし、南椽みなぐさに日和ひなぼつこの長閑ながかんな夢ゆめを見ているものもある、「時」は一刻も吾々われらを用捨もちすてしない。「質朴しつぱくな村の實在じつざん」それは暫しばらくし時流じりゆうにさゝやかな渦うずを卷まいて居るけれどもやがては淙々そうそうの響こゝろをなしつゝ、僞いつはりらぬ自然しぜんの懷なつこころに、物穩ものうだまやかな「生」の戦いくさをつゞけ逝く事であらう。

(完)

谷 底 へ

山の 入 譯

十二月ベルリンで開かれた獨逸劇場同盟の委員會には昔懐しい私の一親友も出席しゅつせきしていた。彼はオスカル、ワルターといつて、數年來、既に場末ばまつの或る劇場に入つて居たが、今度その劇場の委員と